

妊娠から育児期間までの母親の感情状態変化に関する縦断的検討
A Longitudinal Study of the Mood of Women during Pregnancy and Childcare Period

田辺恵子 Keiko TANABE

高知医科大学看護学科

Department of Nursing, Kochi Medical School

〒 783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮

Kohasu, Oko-cho, Nankoku-City, Kochi, 783-8505

Abstract

The purpose of this study was to describe the prenatal and postnatal process of women's mood and to determine the relation between the mood and related factor. The subjects of the study were 40 women during pregnancy and child period. Results of this study were as follows.

1. Positive mood score was higher in women during pregnancy and childcare than in female students.
2. Negative mood score was lower in women during pregnancy and childcare than in female students.
3. Positive mood significantly correlated with approach feeling for child score.
4. Positive mood significantly correlated with acceptance child rearing score.
5. Process of women's mood during pregnancy and child period was four pattern.

キーワード： 母親の感情状態 縦断的検討

Key words: Mood of Women Longitudinal Study

はじめに

妊娠から育児期間までの母親の心身の状態についての関心は、身体的状態では主に疲労、心理的状态では主に不安とうつ的感情が多く、これらに焦点を当てた実証的な研究が相当数なされている^{1) 2) 3)}。これらの研究は、問題解決を目指した、否定的な面の実態把握となっている。母親の感情状態は否定的な面に限らず、児を得た喜びから肯定的感情もあり、この感情は母性性の発達、母子相互作用に大きく寄与するものである。

そこで、本研究では母性性の発達を促す母親の援助のための基礎的資料を得るため、妊娠5～6ヶ月から出産後6ヶ月までの母親の感情の推移を、寺崎⁴⁾の開発した多面的感情状態尺度を用いて縦断的に測定し、あわせて対児感情尺度、児の世話の受けとめ方との関連を検討したので報告する。

方法

1.対象

研究の同意の得られた妊婦40名を対象に表2に示したように妊娠5～6ヶ月から分娩後6ヶ月まで7回縦断的に調査した。

2.調査内容

各調査内容の調査時期は表1に示したとおりである。

表1 調査項目と調査時期

	妊娠 5～6M	妊娠 7～8M	出産後 1～2W	出産後 1M	出産後 3M	出産後 6M
多面的感情状態尺度	○	○	○	○	○	○
対児感情尺度	○			○	○	○
児との関わりに対する 受けとめ方				○	○	○

1) 多面的感情状態尺度；

得点範囲は肯定的感情と否定的感情 60～15点、中性的感情 40～10点である。表2に示したように、この尺度は、親和、活動的快、非活動的快からなる肯定的感情、集中、驚愕からなる中性的感情、抑うつ・不安、敵意、倦怠からなる否定的感情の3下位尺度から構成されている。大学生813名に適用した各下位尺度のクロンバックの α 係数は、0.81～0.89であり、尺度の内的整合性（信頼性）が確かめられている。

表2 多面的感情状態尺度

肯定的感情状態	否定的感情状態	中性的感情状態
活動的快 はつらつとした 活気のある 気力に満ちた 元気いっぱいの 陽気な 非活動的快 のんきな のどかな ゆっくりした のんびりした おっとりした 親和 恋しい 愛らしい すてきな いとおしい 好きな	抑うつ・不安 自信がない 悩んでいる くよくよした 不安な 気がかりな 敵意 攻撃的な うらんだ むっとした 敵意のある 憎らしい 倦怠 無気力な だるい つまらない 疲れた 退屈な	驚愕 びっくりとした 動揺した はっとした びっくりした 驚いた 集中 注意深い 思慮深い 丁重な 慎重な ていねいな

2) 対児感情尺度；

花沢⁵⁾の作成した子に対する肯定的-受容的な感情として接近感情得点と否定-拒否的な方向の感情として回避感情得点で構成され、それぞれ28項目で得点範囲は42～0点である。

3) 児の世話の受けとめ方

夜中の授乳やオムツ交換をどう思うか等児の世話の受けとめ方を、気にならないから煩わしいまで5件法の回答で、合計9項目の内容で構成され、得点範囲は45～9点である。

結果

1. 対象の属性

表3に示したように、対象40名の平均年齢は30.8歳、初産の人は28人、経産の人は12人で、職業を持つ人は28人、無職の人は12人であった。

表3 対象の属性

平均年齢	30.8歳 (SD=5.6)
初経産	初産 28人
	経産 12人
職業	有職 28人
	無職 12人

2. 大学生女子との比較

表4に示したように、寺崎の調査⁴⁾による大学生女子(318名)の平均値に比べて、統全調査時期を通して肯定的感情は高く、殊に親和は高い値であった。一方、否定的感情は低く、中でも倦怠、敵意は低い値であった。

3. 時期別比較

表4に示したように、肯定的感情は妊娠期間から出産後1ヶ月までの期間では殆ど変化なく、また、各調査時期別に平均値を比較したところ、親和は入院中、出産後3ヶ月、6ヶ月が高く有意差が認められた。否定的感情は妊娠期間には高い傾向がみられたが、出産後は入院中から低下し、出産1～2週では一時上昇したが、その後低下した。各調査時期別に平均値を比較したところ、敵意と倦怠は妊娠中より出産後が低く有意差がみられた。

4. 肯定的感情と対児感情との相関

表5に示したように、出産後1ヶ月、3ヶ月、6ヶ月の肯定的感情と対児感情の接近感情得点との相関係数はそれぞれ0.52、0.58、0.57で有意であった。児を受容している母親程肯定的感情が高い傾向がみられた。否定的感情と各期の対児感情の回避感情得点との相関係数はすべて負で、出産後3ヶ月は有意であった。

表4 多面的感情状態得点
—女子大生と各期の母親の比較—

	女子 大学生 (n=318)	妊娠 5～6M	妊娠 7～8M	入院中	出産後 1～2W	出産後 1M	出産後 3M	出産後 6M
肯定的感情	39.7	44.1	44.2	45.4	44.5	44.8	48.4	48.2
親和	12.3	15.1	15.2	17.4	16.8	16.8	17.7	17.2 *
活動的快	13.4	13.6	14.4	14.6	14.1	14.0	15.9	16.1
非活動的快	14.0	15.1	14.6	13.4	13.6	14.0	14.9	14.9
中性的感情	19.1	22.0	22.2	24.0	24.0	24.2	24.2	23.6
集中	10.9	13.1	13.0	14.5	15.0	14.9	15.1	15.0
驚愕	8.2	9.3	9.2	9.5	9.0	9.3	9.1	8.6
否定的感情	30.9	27.7	28.9	25.1	27.0	26.9	26.1	24.9
抑うつ・不安	11.2	11.3	10.1	10.9	11.1	11.0	10.7	11.1
敵意	7.6	7.6	7.7	5.3	6.3	6.4	6.4	6.3 *
倦怠	12.1	11.8	11.1	8.9	9.6	9.4	9.0	8.8 *

女子大学生は寺崎の調査による

* $p<0.01$

表5 接近得点（対児感情尺度）と各感情得点の相関係数

	妊娠 5～6M	出産後 1M	出産後 3M	出産後 6M
肯定的感情	0.52 *	0.58 *	0.57 *	0.45 *
中性的感情	0.10	0.33	0.27	0.12
否定的感情	-0.41	-0.36	-0.54 *	-0.43

* $p<0.01$

5. 児の世話の受けとめ方得点と各感情得点の相関

表6に示したように、出産後3ヶ月、6ヶ月の児とのかかわりの受け止め方と肯定的感情との相関係数は有意であった。殊に出産後6ヶ月は0.83と強い相関が認められた。出産後6ヶ月の児とのかかわりの受け止め方と否定的感情との相関係数は有意であった。

児の個性（行動の予測のしやすさ、状態の読み取りやすさ、反応のあらわれやすさ）が、親としての有能感や無力感を左右するという⁶⁾。また、仁平⁷⁾は生後1ヶ月から4ヶ月の母子について泣いている理由がわかる等児の状態がわかりやすいことや扱いやすさが母親の自信につながるという。近年の乳児研究の知見が示すとおり、新生児は誕生直後から積極的に人とのコミュニケーションを求める生得的な能力を有しており、一方、母親の側

もまたそれに呼応して母子の絆が確かなものになっていく⁸⁾。このように児の反応に意味を理解しコミュニケーションしながら児の世話が出来るなら、つまり、出産後母親が児の世話を受け入れていくと母親は肯定的感情に満たされていくと推測される。

表6 児との関わりの受けとめ方得点と各感情得点の相関係数

	出産後 1 M	出産後 3 M	出産後 6 M
肯定的感情	0.42	0.54 *	0.83 *
中性的感情	0.06	0.19	0.20
否定的感情	-0.46	-0.42	-0.70 *

* p<0.01

6. 感情状態の推移

それぞれの感情状態の時期を追っての変化や3感情状態の変化の推移は個別的であったが、いくつかのパターンが見いだされた。肯定的感情と否定的感情の得点の差異が大きい場合、肯定的感情と否定的感情の得点の差異がなく接近している場合、肯定的感情と否定的感情の変化は必ずしも逆比例していない場合、規則性のない場合がみられた。

大きく分類すると4つのパターンが認められ、以下それぞれを代表するケースについて述べる。

1. ケースA

肯定的感情、否定的感情の差異が大きく、しかも、肯定的感情は全体平均より高く、否定的感情は全体平均より低い値であった。肯定的感情および否定的感情は共に時期的変化は少なく安定している。変化が少なくはっきりしないが、肯定的感情と否定的感情とは逆比例して変化している。

2. ケースB

肯定的感情と否定的感情の差異ほとんどない。時期別の変動少なく、変化なく推移している。肯定的感情が全体平均より低く、否定的感情は全体平均より高い値である。肯定的感情と否定的感情は関連なく変化している。

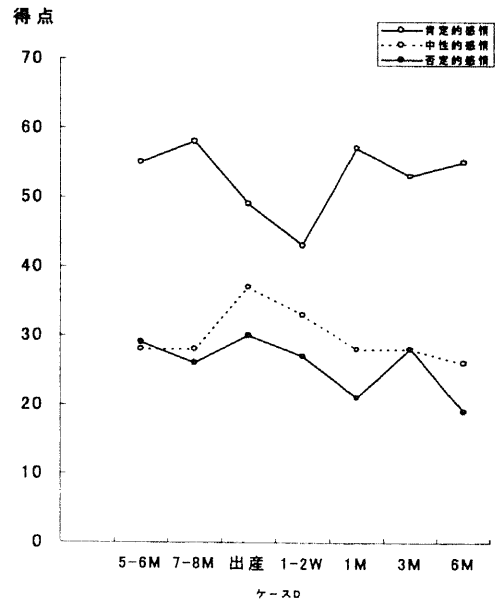
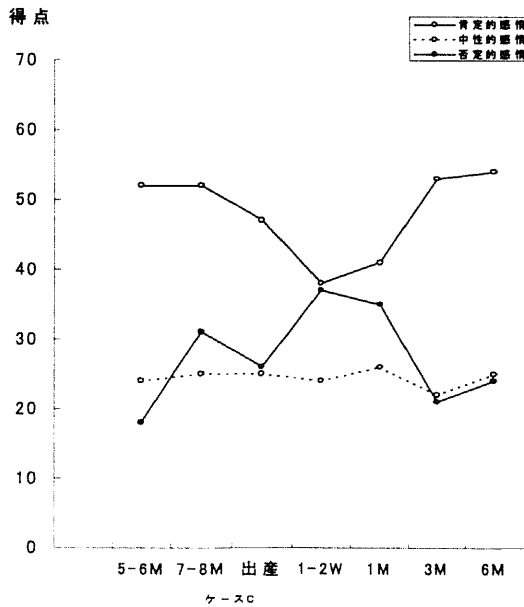
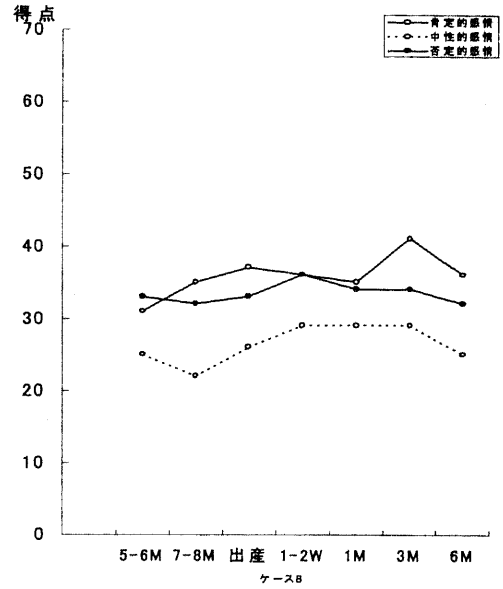
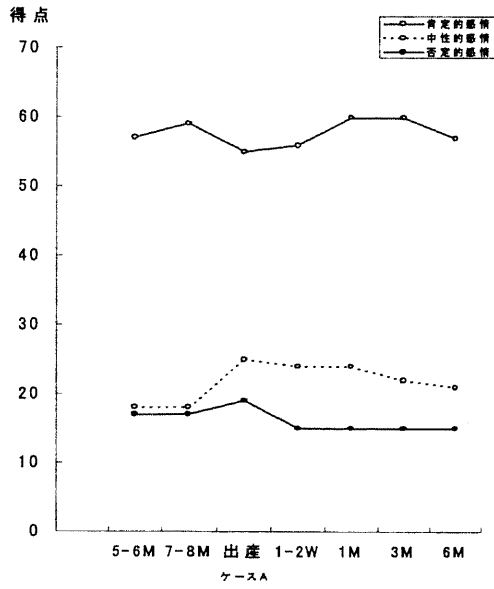
3. ケースC

肯定的感情、否定的感情ともに時期的変化が大きいケースである。肯定的感情と否定的感情との差異は一定せず、差異が大きい時期と接近している時期がある。肯定的感情、否定的感情ともに出産後1～2週目を下限および上限として上昇および下降している。肯定的感情が全体平均より高く、否定的感情は全体平均に近い値である。

4. ケースD

肯定的感情、否定的感情の差異が大きい。出産後入院中および出産後1～2週に肯定的感情は低下している。肯定的感情が全体平均より高く、否定的感情は全体平均より低い値である。肯定的感情と否定的感情は関連なく変化している。

出産後肯定的感情は低下し、否定的感情は上昇している。そして、その後出産後6ヶ月までに肯定的感情は上昇、否定的感情は下降し、ともに回復している。



出産直後は妊娠中よりも肯定的感情が低く、否定的感情が高くなる傾向が殆どの者に認められた。その後は、再び肯定的感情が上昇、否定的感情が下降し、この変化のパターンは全員共通しているが、回復時期には個人差があり、1ヶ月検診時点では回復途上にあつて、まだ肯定的感情が低い者もあり、1ヶ月健診において身体面に加えて、心理面についても肯定的感情にみたまされているか把握し、適切な支援をすることが望まれる。

考察

妊娠・分娩・産褥の過程は、一人の女性が母親となるための出発点である。この過程は、生理的過程であるとともに、その女性の個別的生活状況やさまざまな社会的要因が反映される心理的過程でもある。母親たちの育児不安が指摘され、子どもの愛情をもてなくなっている母親、自分勝手な母親といった表現のもとに、今日の母親たちの母性喪失が批判されることもしばしばである。一方で、母親役割の受容に関しては、全般的に、消極的・否定的意識よりは積極的・肯定的意識のほうが強く、とりわけ、母親になったことで人間的に成長したという意味で評価している母親も相当数認められる。母親役割受容を消極的・否定的に受けとめる意識の中にも、子どもを産まなかったほうが良かったとか、子育てを負担に思うというものではなく、むしろ、育児のために行動が制約されたり視野が狭くなることを悩む傾向が顕著あり、この自分の生活と育児の間で揺れ動く感情が、母親として不適格ではないかとの悩みにつながっている場合もあると思われる。

本研究においても、母親の感情状態が妊娠期間から出産後に渡る経過でさまざまに変化し、個人差も大きいことが示唆された。母親の感情状態は児の受容状態を反映し、児の世話を肯定的に受けとめる者程肯定的感情を強くもっていた。この間、母親は総じて肯定的感情に満たされて母親役割を受容していたと推測された。

また、感情状態の変化は個別性があり、肯定的感情と否定的感情とは必ずしも逆比例して変化する場合ばかりではなく、両感情は相反する感情状態とは限らず、否定的感情のみならず肯定的感情も含めて多面的に捉えることの必要性が示唆された。従来から用いられてきた状態不安のような単一の尺度で感情を測定するよりも、多面的に感情状態を測定した方がより多くの有益な情報を与えてくれる可能性を持っていると考えられる。否定的感情が強くなるストレス因子を探ることと併せて、肯定的感情にも注目し、肯定的感情を高められるように、あるいは低くしている因子を探ることで、母親の母性性の発達を促し、育児を肯定的に受けとめられるよう支援す方策を見いだせると考える。

おわりに

妊娠5～6ヶ月から出産後6ヶ月までの母親の感情の推移を、寺崎⁴⁾の開発した多面的感情状態尺度を用いて縦断的に測定し、あわせて対児感情尺度、児の世話の受けとめ方との関連を検討した。その結果、①妊娠5～6ヶ月から出産後6ヶ月までの母親の感情状態は女子大学生より肯定的感情が高かった、②肯定的感情状態は対児感情と児の世話の受けとめ方と関連が認められた、③妊娠期間から出産後に渡る経過でさまざまに変化し、個人差も大きく、4パターンに分けられた。が明らかとなった。

今回は対象数が40名と少なく、初産婦と経産婦との差異等属性別の比較や十分な統計的分析が行えず、今後は対象数を増やしての検討が課題である。

調査にご協力いただいた皆様に深謝いたします。

本研究の一部は第58回公衆衛生学会で発表した。

文献

- 1) 吉田弘道 山中龍宏 (1999) 育児不安尺度の作成に関する研究—1歳半児の母親用試作モデルの検討. チャイルドヘルス 2 (2) 139-143

- 2) 中島和夫 齊藤友介 (1999) 母親の育児不安負担感に関する尺度化. 厚生指標
46 (3) 11-18
- 3) 日下部典子 坂野雄二 育児に関わるストレスの構造に関する検討. ヒューマン
サイエンスリサーチ 8 27-39
- 4) 寺崎正治 (1992) 多面的感情状態尺度の作成. 心理学研究 62 350-356
- 5) 花沢成一 (1992) 母性心理学 医学書院
- 6) Goldberg S (1977) Social competence in infancy ; A model of parent-infant intervation.
Merill-Palmer Quarterly 23 163
- 7) 仁平義明 村井憲男 村井則子 (1986) 母性確立への乳児の個性の影響. 母性衛生
27 (4) 700-705
- 8) 大日向雅美 (1986) 母と子の絆—生理学的解明の意義と問題点. 人間発達研究 11
28-32